國文學 7

二〇〇八年 第五三巻十号

解釈と教材の研究

最終回 田中英道「父が子に語る日本の歴史」

日本語・日本文学・日本文化

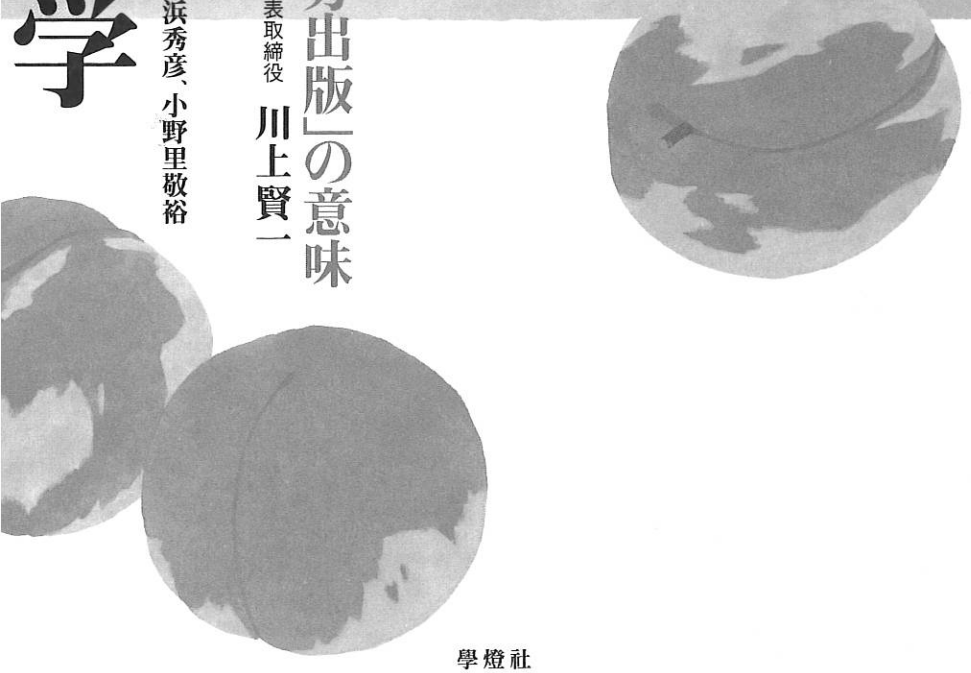
特集 地方の文学

❖ インタビュー「地方出版」の意味

地方・小出版流通センター代表取締役 川上賢一

❖ 小特集 沖縄を探る

村上呂里、宮城公子、本浜秀彦、小野里敬裕



學燈社

國文學 7

❖ 特集 地方の文学

國文學 解釈と教材の研究

平成二十年七月十日発行（毎月一回十日発行）第五十三巻第十号七月号
昭和三十一年九月二十五日 第三種郵便物認可 （通巻七七〇号）

定価 一六〇〇円 本体一五二四円

第五三巻十号 二〇〇八年七月号

辞典七〇〇点突破！定評のある東京堂の辞典

源氏物語 注釈書・享受史事典

伊井春樹編 平安末期から幕末までの注釈書五二五点の詳細な解題と享受の歴史を年月日順に克明に追う。巻末に一〇〇頁に及ぶ書名・人名索引を付した。源氏研究の第一人者である編者の四十年に及ぶ資料収集の集大成。待望の復刊。菊判 八三二頁 定価一八九〇〇円

迷解 国語笑辞典

郡司利男著 「悪魔の辞典」の訳者であり、言語学の泰斗である著者がことばを手玉にとり、粋な日本語の世界を鋭い言語感覚で解説した「笑」辞典。定価一八九〇円

假名草子集成 第四十三巻

花田富二夫他編 本集成は假名草子のすべてを網羅的に収録し厳密な校訂をもとに翻刻する。第43巻に収録した作品は「住吉相生物語」・「醒睡笑」。定価一八三七五円

日本語・日本文学の研究に必携！

CD-ROM版 **鎌倉遺文 古文書編 全四十六巻**

竹内理三・東京大学史料編纂所編 あらゆる分野において実証的な中世の研究には必須の根本史料である鎌倉遺文の古文書三五〇〇余通を収録。鎌倉時代の文学・日本語の研究にも有益な史料として情報を提供する。検索は、キーワード・年・文書から選択・組み合わせができる。キーワード検索は地名・人名を入力すればすべての文書から検索が可能。詳細内容見本進呈 価格九四五〇〇円

（価格は税込）

東京堂出版 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1—17
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746
http://www.tokyodoshuppan.com

見立の意味がわかると浮世絵はこんなにおもしろい

図説「見立」と「やつし」 —日本文化の表現技法—

国文学研究資料館編（代表 山下則子） B5判上製・カバー装・262頁・二〇三九〇円

「見立」はあるものを別のものになぞらえること、「やつし」は昔の権威あるものを現代風に卑近にして表すこと。文学・美術・芸能のジャンルを超えて存在する日本文化の特徴的な表現様式をカラー図版105点・モノクロ図版54点を使って視覚的に読み解く。

林屋辰三郎芸能史研究奨励賞受賞！

約一二五〇点の図版資料から操り人形の通史を描く

日本操り人形史 —形態変遷・操法技術史—

加納克己著 B5判上製・貼函入・880頁・五三〇〇円

弥生から近世までの遺跡出土の人形遺物史料と、全国に伝世する操り人形を精査して、その形態と操法の史的変遷を膨大な写真・図版と共に示した画期的大著

都市と地方の文化的繋がりから近世文学史を再構築

近世大名文芸圏研究

渡辺憲司著 A5判上製・貼函入・468頁・九、一七五円

八木書店 出版部 【呈詳細内容見本】＊定価は本体＋税5%の総額表示です。
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8 K係迄
03-3291-2961〔FAX-6300〕 http://www.books-yagi.co.jp

ISSN 0452-3016
雑誌 03787—7

4910037870780
01524

Printed in Japan

連載

心意伝承

―遊働世界に生きる―

本荘雅一

第十回　山水遊泳を映す生活①　東山水上行

宇宙放浪という日常を知って

私がまだ高校生時代のある日、徳川家康の子孫に当たる女子生徒が、彼氏にこんな話をしていた。

「地球が自転しながら太陽の周りをまわってるってことは、『今、ここ』で私たちがおしゃべりしている空間は、昨日までは宇宙空間だったってことよねえ。なんか、すごいよね。」

いつもは機知に富んだ返しをする彼氏も、このときは返答に窮していた。ことに、近くにいた私の受けた衝撃は、その後の自分の思考法を根底から揺るがすほどに大きかった。

自転と公転。知識としては持っていながら、それを身体で考えてはいなかった。

地球は太陽系をまわる。太陽系は銀河系をまわる。銀河系のような無数の島宇宙は大宇宙をまわる。大宇宙の絶対中心はどこかわからない。

つまり私たちは、常に宇宙の未知の領域を漂い、放浪しているということだ。「天動説が間違っていて地動説が正しいということではない」という話は、こういうことなんだとはっきり感じた。仮の中心点をどこに置くかの違いで、たまたま「地動説」のほうが法則的に説明しやすい、というにすぎない。視野を大宇宙にまで広げれば、「地動説」で構築された整然とした宇宙図も、渦の中心を見失った混沌へと崩壊する。私たちは常に不思議の世界、つまり思議の及ばない虚空にさらされている。

日常が日常であり続けるために、実はものすごい冒険の連続を経ているわけではないか。子供の時にくるくる目をまわし、野原に寝そべって蒼空を漂う浮遊感を楽しんでいたのは、こうした日常を支える宇宙感覚にたちかえっていた、などと言えば大げさな妄想にすぎないだろうか。

山の稜線や、田園地帯でもよいだろう、視界を遮るもののない、人工の光のない真っ暗闇の夜に立つと、ほんとうに、宇宙空間に放り出されたような絶望的な浮遊感を味わえる。それは宇宙との一体感でもあり、かろうじて動悸を打って瞬くこの命があれら星屑と同じひとかけらにすぎないという、どうしようもない実感である。

自分が生きる意味、人間が存在する意義といったことを議論しても、抽象的・観念的なものになってしまう。なにか、生きるということの〝凄み〟を思い知ることができたら、そのほうが素晴らしいのではないか。などと、「徳川さん」のおしゃべりが、人類の生命活動の根本に触れるヒントになるような気がしたものだった。

道元は全身の細胞で考える!?

大学に入って間もなく、道元（一二〇〇～一二五三）の次の一節を聞く機会があった。

自己をはこびて萬法を修證するを迷いとす。
萬法すゝみて自己を修證するは悟りなり。

（『正法眼蔵』現成公按）

強烈な衝撃を受けた。同時に、高校時代の「徳川さん」の話から受けた衝撃もまざまざと思い出した。

自分の知性理性を駆使して、森羅万象の原理法則を認識しようなどと企てることが迷いなのだ。森羅万象の働きに導かれて、そこに生かされている自分を、本質的な自己と感得するのが悟りである。

記憶力の人一倍悪い私が、この言葉は一度聞いて二度と忘れられなくなった。人間が世界をどうにかしようとするのは、終わりのない迷いに踏み込むだけだ。世界が私たちをどう生かそうとしているのかを感得することで、迷わないぶれない生き方ができるはず。

〝不惑〟を越えた今も、具体的実践はまるでないが、とにかくその時にも感動したし、今も折にふれてその一節が頭の中に鳴り響く。強烈だったというだけでなく、何か意味するところ自体が、「徳川さん」のおしゃべりに通じている気がした。まったくばかげた飛躍かもしれないが、結びつく気がしてしまった。

妄想を重ねてみると、道元は人間のちっぽけな知力をもって宇宙をねじ伏せようとすることの愚かさを訴え、宇宙の意思自体が本質的な自分の意思であるとして受け

留めようとする、脱力した知性を重視していると思える。だから、ひとりの女子高生が皮膚感覚をもって、宇宙に触れ続けていることの「すごさ」を味わうのは、それ自体も悟りといってよいのではないか。

きっと道元も、全身の細胞で思考する人なのだろうと思って、『正法眼蔵』（岩波日本古典文学大系）をゆっくり読んでいたら、「山水經」で次の一節が飛び込んできた。

青山常運歩（芙蓉道楷〈一〇四三～一一一八〉）
東山水上行（匡眞大師文櫃〈八六四～九四九〉）

これだ。このイメージ世界を道元が持っているから結びつくのだ。道元の悟脱と、「徳川さん」の体感とは、一個人の叡智とか少女の夢想といった次元を超えて、もっと集団的、集合的な思惟の次元で通じ合っている。「深淵な哲理」「大思想」も心意伝承の血脈を構成していると言えまいか。むしろ、心意伝承のありようを端的に教えてくれるのを哲理と呼んでいるのに過ぎないのではないか、などと考えてしまった。

青山（地球）は常に運行している。その中にいるだけで外（真っ暗闇の星空）を見ないでいると、青山（地球）は不動のものと思えてしまうが、ひとたび視点を変えてみれば、実は全く不動のものではないことがわかる。

逆に船に乗って風景を見ると、今度は、自分が動いているのではなく、山が動いていると感じられる。これもまた決して錯覚なのではなく、真理の一つなのである。

岩波日本古典文学大系本の注釈では、「東山」とは東西南北の「東」ではないと述べる。宇宙に中心はないのだから相対的な方向指示を意味するのでなく、「尽界」なるもののことであると。

ただ、「尽界」というのがどういうことかよくわからない。いいのではないだろうか、原文通り東西南北の「東」で。方向四分節の一つというよりも、方位についての感覚で、その感覚の機縁、ヒントとして、「東」の語を道元があげてくれているにすぎない。

もちろん、「東山水上行」とは道元自身の発言ではなく、宋国の雲門宗の祖、匡眞大師文櫃の語録から引用されたものだが、膨大な量の語録から特に選ばれたフレーズである。民族の違いを超えて、宇宙＝自己を体感できる生命指標として取り上げたものと言える。

では「東」っぽい感覚とは、具体的にどんな感覚なのか。

それを自分で体感するのが道元のいう修行であろう。

論証するようなものではない。なので少々、勝手な主観を蛇足しておく。私の場合、東といえばほやほやした精気の立ちのぼってくる感覚を催す。だいだい色のモチみたいな太陽。朝の山からわき出る靄。積み上げられた馬糞牛糞の発する湯気。自分がそれらになったような感覚。そうした新鮮な精気がにおい立ってくるような隆起物を東山と感ずるが、いかがであろう。

山は水上を行く

第八回で取り上げた、崇神紀四八年条の豊城命の夢、「自ら御諸山に登りて東に向きて、八廻弄槍し、八廻撃刀す」とあったことが想起されるのである。何となく読み飛ばしてしまいそうな伝承の中にも、古人の、合理的な説明のつかない、それでいて心の底から噴き出してくる体感の痕跡が残されている。

そしていつの時代から始まり、どのように変遷したともわからぬ様々な祭りに、日本人たちの同様な生活修行の形跡が認められるのである。与えられた生活世界で営む日常は、ことさら活性剤注入の演出をしなければ、生活世界そのものが惰性化し、淀み、腐敗してしまうと感じられただろう。日常の時空そのものが、赤ん坊の細胞のように、目立たなくとも爆発的な活動をしているはずなのに、〝日常〟を維持し続けるための核融合核分裂のすごさに鈍感になることが、本当に生活世界の停滞ともなるのである。

個人の知恵でなく、生活する集団の知性が、世界の遊働を活性化させる演出を生んだ。「東山水上行」「青山常運歩」と共通するイメージを表現する祭祀である。

山が動く演出といえば曳山である。京都祇園祭、飛騨高山祭、秩父夜祭に代表されるように、山車・曳山、地車（大阪岸和田）、山あげ（栃木烏山）など、山に見立てた大きな造りものを一か所に固定せず、ゆったりと、あるいは激しく運動させる祭りが全国に数多くある。現在はほとんどがアスファルトで舗装された道路上を転がしてゆくが、かつては雨が降ればぬかるむ土の上での祭りだった。

とくに滋賀県大津市天孫神社の四宮祭（大津祭）で曳山巡行の行われる地帯は、かつては沼地であったらしい。大津駅前中央通りの石柱に、その地帯のかつての地名であった「葭原町」の由来説明がある。それによると、その付近は江戸時代に入るまでは一面に葭の生い茂った沼地にして漁師の家が数件あるのみであり、その沼地が葭原沼と呼ばれていたという。

祭りの発生については、『近江の曳き山祭』（一九八四年　サンブライト出版）によれば、慶長七（一六〇二）年に家康によって大津町が天領とされ、港町、宿場町として整備されたころ、同じ慶長年間に曳山が祭礼に取り入れられたとある。つまり、まだ水上生活の記憶が新しい頃に、山が流動するイメージをそこへ持ち込んだということになる。

水上を山が遊泳するイメージ。

それをもっとストレートに演出するのが、「海の祇園祭」とも称される伊根八坂神社祭大祭である。京都府与謝郡伊根町日出の伊根湾は、ＮＨＫ朝の連続ドラマ「ええにょぼ」の舞台となった、舟屋で有名な海上の町だ。

伊根八坂神社祭は例祭のほかに、数年に一度、大漁の年に大祭として、大がかりな船屋台による海上渡御の行事が行われる。それが「海の祇園祭」といわれるゆえんだが、平成になってからは四回しか行われていない（うち二回は略式）とのことで、残念ながら私はまだ実見していない。伊根町役場提供の資料に基づいて記述するしかないが、伊根湾内を巡行する船屋台は、七艘の漁船（「ともぶと」という）を筏に組んだ土台に築かれた二階建ての芝居舞台である。歌舞伎芝居や歌謡、漫才ショーが上演されながら、湖面のように静かな海上をゆらりゆらりと渡ってゆくらしい。

船屋台そのものは四艘あって、それぞれ「稲荷山」「宝来山」「神楽山」「蛭子山」という。だから、実際に祭礼に奉仕する人々が、山の海上出現と「水上行」を明確に自覚し、演出しているわけである。

大津祭の曳山のほうには、人形からくりが施されていた。巡行中の要所要所で「所望ッ」の声がかかると、からくり人形が芸を披露する。伊根の船屋台では芸能が催される。

こうした演出の起源は基本的に近世期以降に求められようが、芸に奉仕する俳優を本来「俳優（態招・伎招）」といい、神威神霊を招ぎ寄せる巫覡のようなものであったから、さらに遠く長い心意伝承を表しているに違いない。山が渡るということは神威神霊の発動にして、同時に神人交感のありさまを表象するものではなかったか。そのための芸能ではないだろうか。

船屋台を実見した上原輝男はこう述べている。「伊根地方ではそれぞれの在所から、屋台を祭の場に曳き入れることを、『祭礼が入れられる』という。（中略）祭礼が人間行為としてだけではない。両者ともに異次元空間の展開であるとする意識が、まだ残っているからだと思いたい」（『曽我の雨・牛若の衣裳』二〇〇六年　暮しの手帖

曳山の様子（大津祭）

海上渡御の行事（伊根町）

社編集)。

伊根湾は丹後半島若狭湾の北縁に位置するリアス式に浸食された入江で、湾口には青島があって風浪の影響を湾内に及ぼさない。潟湖のような静けさをたたえた海だからこそ、海岸の背後は山が迫って平地のほとんどない地域にも関わらず、海面に接するかのごとき舟屋造りの民家が発達した。いわば海上に浮かぶ生活が、この地の人々の日常である。

ほとんど漁業に頼るしかない生活に、ときとして大漁がもたらされた折には、山が動き出す形で神の来臨を観たのだろう。「東山水上行」の世界遊働体感は、自然の営みを支配するのではなく、自然にそって自分たちの生きようをわきまえる人々には、等しくもたらされる〝さとり〟といえる。物質的とか精神的とかの区別なく、豊かな生活が、そこにはある。

京都祇園祭の生命指標は駒形稚児

京都の祇園祭が行われる京都盆地は、そこが海だったり湖だったりしていた時代からすでに五〇万年以上たっているようだから(横山卓雄『平安遷都と鴨川つけかえ』八一頁　一九八八年　法政出版)、伊根湾のような条件で考えるわけにはいかない。平安京の中心部をなす現市街地も、盆地北部から南へ広がる扇状地帯に乗っているから、鴨川が氾濫でもしない限りは水浸しになりやすいところでもない(植村善博「京都――盆地の地形と人間活動」『地形と人間』二〇〇五年　古今書院所収)。

こういうと、白河上皇が天下の三不如意として「賀茂川の水、双六のさい、山法師、是ぞ朕の心に随はぬ者」(『源平盛衰記』)と嘆いたほど暴れ川だった話はどうなのかと思われるかもしれない。

確かにその時代を含む十一世紀～十四世紀は、その当時の日記等の記録から比較的低温で春が遅く来たことが分かっているらしい(吉野正敏「歴史時代の気候変動に関する研究の展望」『地学雑誌』116(6)二〇〇七年)。「特に12世紀はかなり低温であった」そうなので、いわゆる小氷期に準ずる状態であったのだろう。すなわち冷夏多雨の気象だったからこそ川も氾濫しやすかった。横山卓雄の調査でもこの時代に洪水が集中して起きている。逆にいえば、こうした気候変動の時代から外れていれば、さほど洪水回数も多くないので、鴨川は必ずしも、歴史時代を通じてずっと暴れ川だったわけではないらしい(横山前掲書七〇～七九頁)。

にもかかわらず、京都祇園祭も水辺イメージと切り離

しては成り立たない祭りなのである。

京都祇園祭のハイライトと思われている「山鉾巡行」は、実は「先の祭り」すなわち前座・余興であって、本祭は八坂神社の神輿渡御である。だから山鉾巡行はどうでもよい、というわけではない。そういうわけではないが、やはり本祭りの大事な点に注意を促しておきたい。

「先の祭り」山鉾巡行を、注連縄切りによってスタートさせるのが「長刀鉾」の稚児ならば、本祭の神輿渡御をスタートさせる稚児もいるのである。

駒形稚児

上久世町の駒形稚児と呼ばれるものだ。

河原正彦の一九六一年「祇園祭の上久世駒形稚児について」(『文化史研究』一四号)に詳しいが、山鉾巡行は七月一七日の午前中に終了し、同日の夕刻に八坂神社の神輿渡御が行われる。その前に、一人の稚児が、駒頭のつくりものを胸に吊って、八坂神社社参にくる。この稚児の奉仕を得て、三基の神輿が勢いよく荒々しく動き出すという流れになるのである。その、駒形稚児の社参の方法が、実に特筆すべきことで、「十万石の格式を誇る長刀稚児さえ南面楼門で下馬する八坂神社の境内へ、馬上のまま乗りいれ、拝殿を三周してそのまま本殿の階へ乗りつける」と河原正彦は瞠目する。

もう少し付け加えると、長刀鉾の稚児は「五位少将」すなわち貴族の位を与えられてもいるし、それどころか、たとえ皇族であっても下馬しなければならない聖域なのである。そこをえらそうに、乗馬のまま、一足たりとも地面に足をつけずに本殿に上がりこむとは、いったい駒形稚児とは何者か。

駒形稚児は上久世地区の綾戸・国中神社の氏子の家から「くじ」で選ばれるもので、河原の調べによると、五〇年後六〇年後の稚児を出す家までも決められるとい

う、かなり無茶なしきたりがあった。必ずその時その家に七歳前後の少年がいるとは限らないのに、である。現在は毎年六月十五日に氏子の子弟から選び出すようにしてはいるようだが（二〇〇五年六月十五日付京都新聞、同十六日付読売新聞）、要はどうしても久世地区から稚児を出すということが大事らしいのである。

地元の伝承によれば、祇園の八坂神社祭神スサノオノミコトが、愛馬である「天幸駒（アメノサチゴマか？）」の形を模してつくられたもので、それを御神体としてスサノオの荒霊（あらみたま）を祀（まつ）ったのがこの村氏神ということらしい。祇園の八坂神社本社ではスサノオの和霊（にぎみたま）を祀（まつ）り、ゆえに祇園祭は「この和荒二魂が合体することによって始めてその祭りの意義が認められるものとし、世間で『久世の稚児さんがこられなければ祭ができない』といわれる」（河原前掲論文）ものであったという。

当然、河原正彦の念頭にも、記紀のオオクニヌシ国作り神話が思い浮かんだであろう。とくに書紀のほうで詳しく語られている伝承だ。オオクニヌシが協力者を求めていると、神々しい光で海を照らしてやってくる者があった。国土平定にはおれが必要だと主張してくる。オオクニヌシが「おまえは誰だ」と聞くと、かれは「おれはお前の幸魂奇魂（さきみたまくしみたま）だ」と答えた。そうしてオオクニヌシはかれ（自分の幸魂奇魂）を三輪山に祀（まつ）った、という話である。

それと同等の役割を、久世の駒形稚児が担っているといえよう。いわばスサノオの活力を表す神霊そのものであるのだから、確かに神域だからといって下馬するような存在ではないということになる。

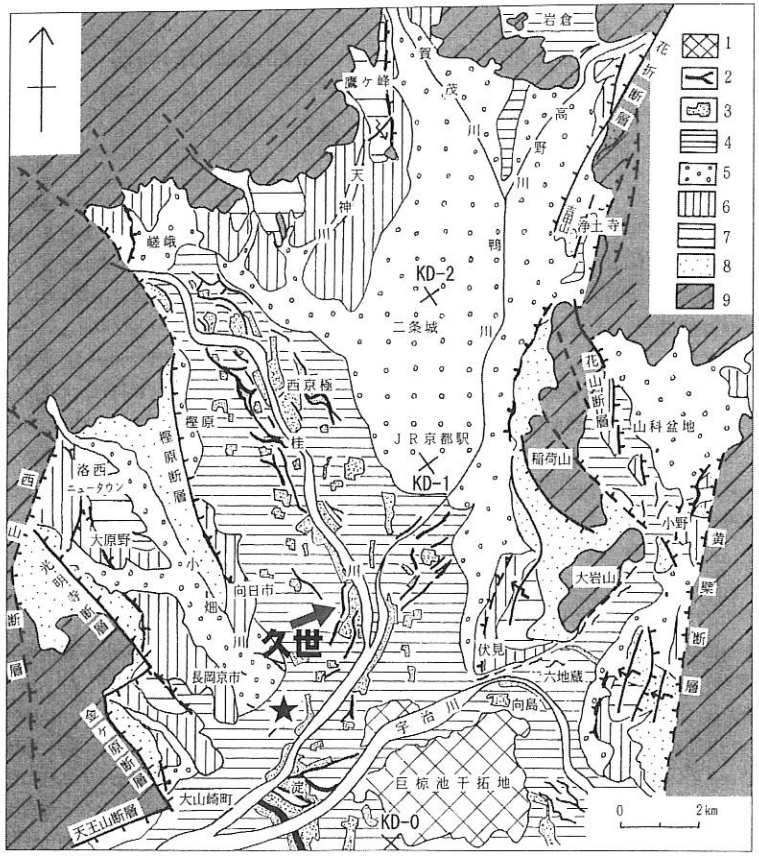
宇宙ステーションとしての久世

だが、なぜそれが久世なのだろうか。

祇園の八坂神社から遠く隔てて、鴨川沿いですらなく、京都盆地の北西部から南東へ向けて流れる桂川沿い、鴨川と合流するぐらい南に下ったところである。平安京の四至（しし）からも大きく外れている。なぜスサノオの荒霊が久世に鎮座するといった、重要な役割をこの地は担わされているのだろうか。

まだ結論と言えるほど確たるものではないが、やはり水辺の風景から催す霊威と結びつくのではないかと思われる。

植村論文図2で示されたように、桂川は、さらに北西側の亀岡盆地ですでに土砂を供給してしまっているため、京都盆地内では扇状地を形成していない。桂川の関与す



植村図2　京都盆地の地形分類図とボーリングおよび水垂（★）地点
1.開拓地　2.旧河道　3.自然堤防および盛土地　4.後背湿地
5.扇状地および谷底平野　6.低位段丘　7.高位段丘　8.丘陵　9.基盤山地
古今書院『地形と人間』（植村善博論文）より抜粋・補足

る地帯はほぼ全面的に後背湿地、すなわち排水不良で浸水しやすい洪水危険地帯と言える（植村図2参照）。

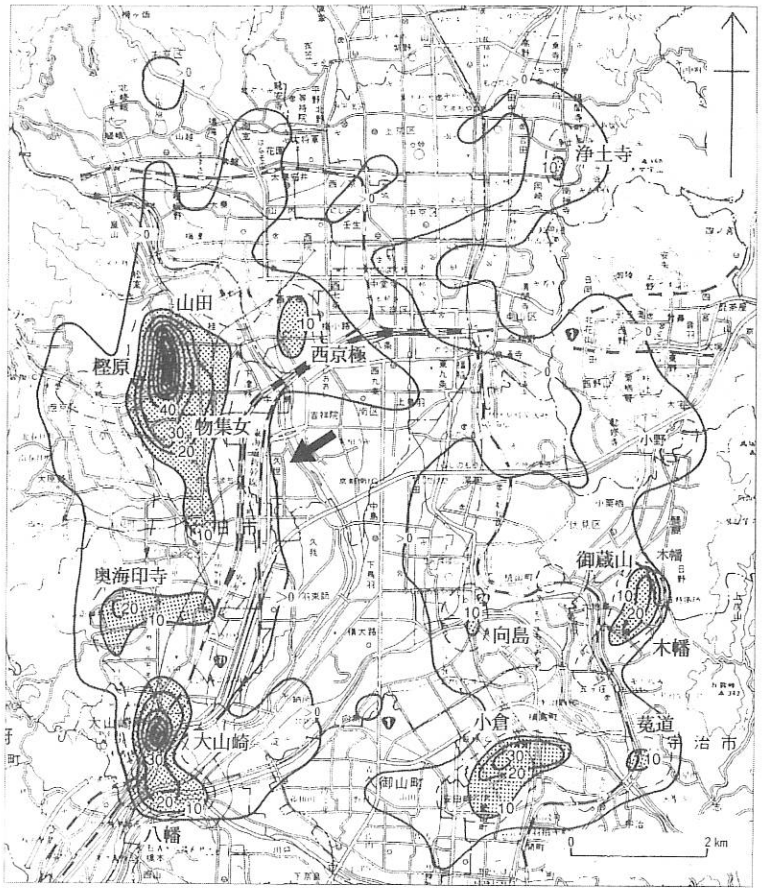
少なくとも軟弱地盤でもあるため、一九九五年の阪神大震災の折には、大まかに見てもこの低湿地帯を中心に住宅被害がかなり広範に分布したようである（植村図7参照）。

久世はこうした地帯のほぼど真ん中に位置するが、不思議と阪神大震災の被害分布からは外れているのである（植村図7参照）。**植村図2**でいえば桂川と鴨川がまさに合流しようとするところ、桂川の西側にある自然堤防帯が、久世である。つまり周囲は水浸しになりやすいところでありながら、久世は微高地であり、水はけのよい砂質層でもあるから、洪水危険度は低いのだそうである。なんと都合のよいところであろう。

細かく見るならば、久世の周辺にも同じような条件の地は存在するから、このことが、久世だけを特別扱いする解答にはならない。だが少なくとも、ときとして大河の中洲として取り残されたような状況となって、その場の被害はまぬかれつつも、水の神威発動からなる世界遊動（トランスフォーメーション）をダイナミックに感じ取れたことであろう。宇宙ステーションのような境界領域である。昔は鴨川と桂川の合流地点ももっとあいまいで、久世の近辺でも網流交（こう）叉（さ）していたかもしれない。としたら、案外、駒形稚児は、神話のように船で八坂神社に遡行（そこう）して行ったりしたのではないかと空想してもいる。

であるから、京都祇園祭も、水域からやってくる霊威にそそのかされて始まる祭りではあった。少なくとも、そのさらに南側には二十世紀半ばまで巨椋（おぐら）池という巨大な遊水池（周囲約十六キロ、六三五ヘクタール）があり、盆地内の低地はいともたやすく水域になってしまう幻影を、多くの人々が抱いていたであろう。現在の都市環境では見当もつかない原風景ながら、今日の日本人も、何か無意識に残そうとしているのである。その心意伝承がある限りは、駒形稚児が最重視され続けるだろう。大阪岸和田の地車（だんじり）にしても、岸・和田という地名が水辺・湿地帯を告げてくれている。山が動くイメージとは、「水上行」とは切り離せないのである。

何より忘れてならないのは、こうしたことが日本人の日常を形成するための核となっているということである。夢のような、天啓のようなイメージに誘われて、生活世界と邂逅（であ）った人々は、そこで日常という時間性を獲得するためには、常に生活空間が水に洗われているような新鮮さを必要とし、ときには大きく荒々しく濯（すす）がれることに、神威発動を観たのである。



植村図7　1995年兵庫県南部地震による住宅の被害分布（植村1999）
等密度線は10戸ごと、アミ部は10戸以上の集中地域を示す。
古今書院『地形と人間』（植村善博論文）より抜粋・補足